



特集

「3R推進の自主行動計画2020フォローアップ報告」 2018年度実績記者説明会開催

昨年12月11日(水)、経団連会館において、当協議会が加盟する3R団体連絡会(幹事長 田中希幸)が第3次の自主行動計画に当たる「容器包装3R推進のための自主行動計画2020」の「2019年フォローアップ報告記者説明会」を開催し、2018年度の成果および取り組みについて、報道関係者を招いて報告しました。

なお、12月3日に開催された、経済団体連合会の「容器包装リサイクル法に関する懇談会」においても2018年度のフォローアップ報告を行っています。

容器包装リサイクル法の定着に向けて、 2006年度から綿々とした取り組み

3R推進団体連絡会は、日本経済団体連合会の提言「実効ある容器包装リサイクル制度の構築に向けて」を受け、2005年12月に「容器包装リサイクル法の目的達成への提言」と題する提言を行い、2006年3月に2006～2010年度を期間とする、第1次自主行動計画を発表しました。

以降5年ごとに自主行動計画を策定・発表するとともに、毎年度フォローアップ報告を行ってきました。

今回は、2016年6月に第3次の自主行動計画として公表しました、2020年度を目標年度とする「自主行動計画2020」の3年度目に当たる2018年度実績のフォローアップ報告となります。

3R推進団体連絡会

容器包装の3R(リデュース・リユース・リサイクル)の円滑な推進と普及啓発を行うとともに、参加団体相互の情報交換を図り、社会に貢献することを目的に、2005年12月に容器包装リサイクル法の対象である、ガラスびん、PETボトル、紙製容器包装、プラスチック製容器包装、スチール缶、アルミ缶、飲料用紙容器、段ボールの3Rを推進する八団体で結成

2018年度の主な成果

事業者自ら実施する3R推進計画

- リデュース目標の達成状況は全体的には着実に目標に近づきつつも、前年度実績と比較すると一進一退の状況ですが、2006年度からの累積削減量は八素材合計で約759万トンに達しています。
- 引き続き関係主体と連携し、地域型びんリユースシステムの構築とびんリユースシステムの持続性確保に向けて取り組みました。
- リサイクル・回収目標の達成状況は、目標値を達成している素材もありますが、未達の素材も大半は目標値に近いところまで来ています。
- 各団体では素材の特性に応じ、容器包装3Rの多様な普及啓発・情報発信を行っているほか、ポイ捨て・散乱防止、海洋プラスチックごみ問題などの環境保全活動に関する普及啓発、情報発信も実施しています。

主体間の連携に資するための行動計画

- 「容器包装3R交流セミナー」を福岡市と京都市の2か所で開催し、各主体との意見交換・交流を推進しました。
- NPO法人「持続可能な社会をつくる元気ネット」を事務局に、3R市民リーダー育成プログラムを2018年度は東京都新宿区で実施し、2019年度は町田市との連携にて新たなプログラムを開始するほか、先輩リーダーによる出張講座や過去育成した市民リーダーを対象としたスキルアップ研修会、自治体担当者を対象とした意見交換も行いました。
- 市民・行政関係者等を対象とする「容器包装3R推進フォーラム」を、これまで13回開催し、延べ2,500名以上が参加しました。2019年度は2020年1月に開催します。
- 「エコプロ2019」、新潟市で開催された「3R推進全国大会」等への出展やイベントに協力しました。



ガラスびん3R促進協議会 自主行動計画フォローアップ報告

Reduce リデュース

着実に進んできたガラスびんの軽量化 限界を超えて、さらなる軽量化への可能性を探る

ガラスびんの軽量化の取り組みは、いち早く今から45年ほど前のオイルショックをきっかけに消費者のニーズへの対応を図り、資源やエネルギーを節約するために、中身メーカーとガラスびんメーカーの連携により、着々とびんの軽量化、薄肉化は進められてきました。

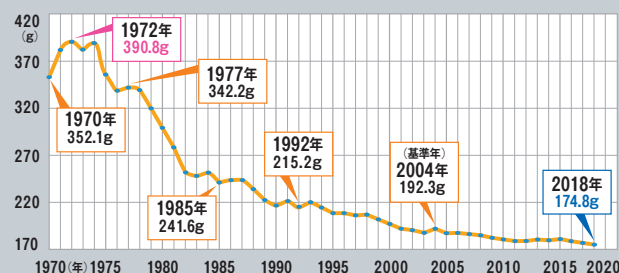
びん一本当たりの単純平均重量の推移を見てみると、1972年390.8g、1985年241.6g、1992年215.2g、2018年174.8g（1972年比▲55.3%）と過去40年以上に渡り、軽量化に取り組んでいます。

一方、中身の保護を前提に薄肉化の限界を見据えたうえで、ユニバーサルデザインなども取り入れて、持ちやすさ、開けやすさといった機能面を補強しながら、軽量化に取り組んでいます。

ガラスびん全体の軽量化が限界に近づいているなかで、2020年度に向けたリデュース目標を、2004年度比1.5%の軽量化（びん一本当たりの平均重量）と設定しており、さらなる軽量化への取り組みが必要となっています。

ガラスびんはリユースが可能であることから、3Rに適合する唯一の容器として3R全体のバランスの中で軽量化を評価していただきたいと考えています。

■ガラスびんの1本当たり単純平均重量(g/本)



■1本当たりの平均重量推移

	2004年(基準年)	2014年	2018年
生産本数(千本)	7,262,950	6,447,949	6,107,220
生産重量(トン)	1,396,582	1,158,682	1,067,713
単純平均重量(g/本)	192.3	179.7	174.8
単純平均軽量化指標	100.0	93.4	90.9
ネット軽量化率指標(加重平均)	100.0	98.6	98.8
軽量化率(加重平均)		▲1.4%	▲1.2%
軽量化による資源節約量(トン)	-	16,452	12,968

Reuse リユース

自主行動計画2020年度目標に向けて システムの持続性確保に向けた取り組みを展開

リターナルびんは業務用と家庭用宅配というクローズド市場を中心に存続していますが、経年的な減少傾向にあります。2018年の使用量は78万トン(基準値42.6%)となり、リター

ナブルびん比率は39.6%となりました。

びんリユースの推進には、消費者・自治体・事業者との連携した取り組みが必須であり、ガラスびん関連業界では、継続し



自主行動計画2020の3年度目にあたる、
2018年の実績をまとめました。
資源循環をめぐる国内外での大きな動きがある中、
3Rに対する一層の理解促進と、
関係主体間の連携が必要とされています。



▼て国の事業への協力や全国各地における
自治体や事業者などと連携したリユースシス
テム構築へ向けて取り組んでいます。

びんリユースシステムの維持・運営の要
であるびん商の取り扱いの大半が1.8Lびん
であるため、リターナブルびん全体の回収シス
テムを維持・運営するためにも1.8Lびんの
回収率の向上が重要です。このため、日本酒造組合中央会、
1.8L壺再利用事業者協議会などとも連携して、1.8Lびんの回

■リターナブルびんの使用量実績（単位：万トン）

	2004年 (基準年)	2014年	2018年	2018年実績 基準年比
リターナブルびん使用量	183	95	78	42.6%
国内ウェイびん量(輸出入調整後)	158	134	119	75.3%
リターナブル比率 (%)	53.7	41.5	39.6	-

「リターナブルびん使用量」「国内ウェイびん量」：ガラスびん3R促進協議会推定

収率を捕捉するとともにリユースシステムの持続性確保に
向けた取り組みも行なっています。

Recycle リサイクル

高度なりサイクル「びんtoびん」を推進するためには、 色選別の精度と、残渣を減らすことが重要

ガラスびんは何度でも水平リサイクルが可能で、国内でリサ
イクルが完結しています。2018年のリサイクル率は、68.9%と
なり、その内訳であるガラスびん用途向けリサイクルは、
2014年の56.3%から2018年の56.7%と安定して推移して
います。

リサイクルされたガラスびんのうち、ガラスびんの原料と
して再生利用された割合を示す指標である「びんtoびん率」
の2018年実績は82.2%となりました。ガラスびんの高度なり
サイクルである「びんtoびん」を推進するためには、市中から
回収されたガラスびんの自治体選別施設での色選別の精度が
重要になります。

また、ガラスびんの再資源化量を増やすためには、分別収
集・運搬・色選別の際に、細かく割れて色分けできない残渣
を減らすことが課題となります。

一人当たりの分別基準適合物引渡量が少なく、品質も悪い
自治体には、日本容器包装リサイクル協会と同行し改善を要
請するとともに、一人当たりの分別基準適合物引渡量が多く、

品質も高い自治体の取り組みを好事例としてWEBサイトな
どで紹介しています。

■リサイクル率の推移

	2004年(基準年)	2014年	2018年
リサイクル率(再資源化率)	59.3%	69.8%	68.9%
ガラスびん用途向けリサイクル率	-	56.3%	56.7%

■カレット利用率の推移

	2004年(基準年)	2014年	2018年
原材料総投入量(千トン)①	-	1,652	1,553
ガラスびん生産量(千トン)②	1,554	1,257	1,156
カレット使用量(千トン)③	1,409	1,230	1,160
カレット利用率(%)③÷①	-	(74.4)	74.7

「ガラスびん生産量」：経済産業省「窯業・建材統計」
「カレット使用量」：日本ガラスびん協会資料およびガラスびんフォーラム資料

■びんtoびん率の推移

	2014年	2018年
びんtoびん率 (ガラスびん用途再商品化量 ÷ 再資源化総量)	80.6%	82.2%

さらに詳しい解説やデータについては、下記アドレスをご参照ください

URL : http://www.3r-suishin.jp/PDF/2019Report/Followup_Report2019_all.pdf

QR?

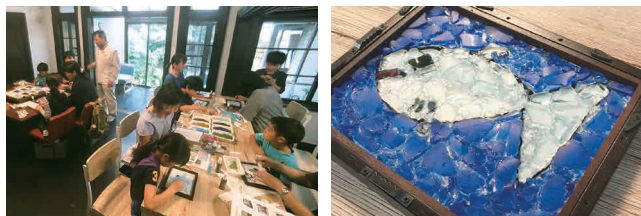
ガラスびんのリサイクル体験『ガラス絵づくり』!

日本ガラスびん協会と宝酒造によるコラボイベント「エコの学校特別授業」を開催

2019年6月29日、渋谷の並木橋オールドハウスにおいて、宝酒造と日本ガラスびん協会による、ガラスびんの色カレットを使った『ガラス絵づくり』体験が実施されました。当日は、企画運営にまつわるお話などを伺いました。



宝ホールディングス株式会社
環境広報部 環境課長
中尾 雅幸氏



古民家スペースで、親子がびんの原料(カレット)を使って絵作り授業

親子の楽しい共有体験で広がる興味と理解

宝酒造にとって、空容器問題は非常に大事な問題です。ゴミ削減について消費者の方々と一緒に考える機会として、宝酒造「エコの学校」を各地で開催しています。その一環として、日本ガラスびん協会主催のガラスびんテージハウスの特別企画として、宝酒造「エコの学校」のプログラムの中から、カレットを利用した「ガラス絵づくり体験」を実施しました。親子での参加なので、帰宅後の会話とか、親子での共有体験として、3Rについて理解してもらえます。家族間で会話を交わすことで、参加した時の一過性の体験として終わらせるのではなく、長く記憶に留まることを期待しています。

優等生・ガラスびんの魅力を、さらに発信

宝酒造が製造する酒類や調味料などの商品は、ガラスびんや缶、PETボトル、紙パックなどの容器に詰めて販売されます。商品が消費された後に発生する空容器は大きな環境負荷を与えるため、容器包装の3Rには特に力を入れて取り組んでいます。

ガラスびんは減少傾向にあります。が、「重い」とか「割れやすい」とか、負の面ばかりに目がいきがちだと思います。しかし、全国レベルでリユースされる唯一の容器であり、茶や透明びんはガラスびんにリサイクルされるなど、とても優秀です。

また、保存性や装飾性などにも優れ、とても魅力的な容器です。ガラスびんカレットで作った『ガラス絵』はとても綺麗で、参加者は皆さん満足して帰られます。

『ガラス絵づくり』体験を通じて、ガラスびんの魅力を再認識するきっかけになれば良いと思っています。



真剣に取り組む姿と沢山の力作が!

Information お知らせ

昨年12月に開催された「エコプロ2019」に出展 ガラスびんの3Rをテーマに展示、クイズも実施。



昨年12月5日(木)~7日(土)東京ビッグサイトで「エコプロ2019」が開催され、155,818人(主催事務局発表)の来場者が訪れ、当協会ブースにも多数来場いただきました。

ブースではガラスびんの3Rをテーマにパネル展示やクイズを実施したほか、ガラスびんの原料やカレットなどを現物展示し、直接目に触れていただきながらガラスびんの魅力等について紹介しました。さらにガチャガチャタイムを設け、ガラスびんに入れた景品を差し上げました。



ガラスびんの原料などを現物展示

テラサイクルの容器再利用事業Loopが 「エコプロ2019」に出展。13社が参画、東京で試験運用*

東京都がプラスチック再利用のビジネスモデルとして選定した、リユース容器を使用した商品提供プラットフォーム(Loop)が、「エコプロ2019」でビジネスモデルの概要を紹介。ブース内にはリターナブルびん商品を始め、Loopのために開発される、環境に配慮したデザイン性も高く機能的な耐久性のある容器の試作品が展示されていました。



専用リユース容器の展示

*Loopは欧米の一部で始まっていますが、東京では来秋から試験運用を行う予定です。

